

まえがき

本書は東アジア、特に韓国と日本の始祖・建国神話に見られる天神・日神信仰の比較研究である。

宗教学者、ミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade) は、一九七六～一九八三年に大著『世界宗教史』(*Histoire des Croyances et Idées Religieuses*, I～III, Paris) を出版した。それは古今東西の宗教を網羅する記念碑的な研究成果の集成である。またエリアーデは一九六八年に『太陽と天空神宗教学概論』(*Traité d'Histoire des Religions*, Paris) を出版し、その宗教研究をつらぬく「聖性顕現 hierophany」の概念を軸にして「天空神」の根本的な性格を明らかにした。それとともに「天空神」がどのように「太陽神」に変容するかも詳説している。

エリアーデの考察の射程は広く、東アジアや中央・北東アジアの宗教や神話にも及んでいる。たとえば彼はこの地域のシャーマニズムの本質についてもすぐれた理論を展開している。それによれば、シャーマンの型は「脱魂型」と「憑依型」に二分される。日本の場合「憑依型」が多いとされ、混合型もあるので、必ずしもエリアーデの型があてはまらないとする反論もある。また、たしかに彼自身、天空神と太陽神の純粋な型よりも両神の混合したかたちの崇拜や信仰の可能性を示唆してはいるものの、東アジアの天空神・太陽神の純粋な型とか、天空神の日神とのどのよ

うな混合型が存在するかについては詳細に語っていない。

本書の研究は、東アジア、とりわけ韓日の天空神と日神（本書では天神と日神と呼ぶ）に照準を絞って、古代の始祖・建国・王権神話に現れる両神の性格を究明することを目的としている。天神・日神の基礎概念はエリアーデの定義に従っている。韓日の神話を見ると、天神・日神が必ずしも判然と区別されていない事実がまず注目される。たとえば高句麗・百済の始祖王東明（朱蒙、他いくつかの呼び名がある）であるが、史書によって「天神の子」「日の子」、また「日月の子」というまちまちな表現が見られる。日本の神話の場合も同様で、神武天皇の一族が「天神」とも「日神」とも見なされている。微妙なケースではあるが、日本の建国神（皇祖神）とも見なされる、タカミムスヒ（タカミムスビまたは高木神ともいう）にも、天神・日神の両要素を見出しうるのである。

エリアーデは日神が王権神話で中心を占めるケースは、エジプトやマヤなどで、そんなに多くないと言う。しかし実情はかなり複雑であり、特に日本のアマテラスにしても、最初から皇祖神として日神であったのか、それとも天神が日神になったのかは一概に論ずることはできない。アマテラスが最初から日神だとしても、歴史的にどのような経緯をたどってそうになったのかは、伊勢地方の原初的な太陽崇拜や沖繩の太陽神「テダ（ティダ）」への信仰なども考察しなければならぬであろう。本書では、可能な限り、多くの神話の載る韓日の史書や、民間信仰の研究書にあたって広く資料を分析する。

本書は今述べたことを中心に、韓日の始祖・建国・王権神話全体と、必要に応じて中国の史料や中央・北東アジアの史料にもあたって天空神と太陽神を比較考察する。

本書の特色をあえて述べれば、韓日の神話・伝説を歴史的・地理的にかなり密接に結びつけると思われた韓国側の「延鳥郎・細鳥女説話」と日本側の「天日矛渡来説話」を重視したことである。この説話は純粹な型の始祖神話でも王権神話でもないが、韓日をつなぐ接点に位置する。比較研究の恰好な説話にもかかわらず両国でこれまで総合的にあまり研究されてこなかった分野である。

韓日は一衣帯水の隣国同士であり、政治的・文化的交流は古来きわめて盛んであった。しかし不幸なことも数多く、誤解と対立も少なくなかった。今後、両国関係が相互理解を深めるためには、古代の歴史・宗教・文化の研究が不可欠と思われる。本書がその相互理解の一つとして役立つなら、これにまさる幸せはない。

著者

韓国と日本の建国神話——太陽の神と空の神
目次

第一章 天神（天空神）と日神（太陽神）——M・エリアーデによる分析

- 1 空の聖性^{ヒエロファニー}顕現としての天空神（天神） 3
- 2 東アジアの天空神（天神） 10
- 3 太陽の神格化・人格化としての太陽神（日神） 13

第二章 古代韓国の建国・王権神話に見る天神と日神

- 1 扶余・高句麗・百濟——中国史書や韓国史書に見られる「朱蒙」神話 18
- 2 古朝鮮・韓国の史書『三国遺事』に見られる「壇君」神話 30
- 3 新羅——朴・昔・金の三氏の始祖神話 35
 - (1) 朴氏の始祖神話——その日神的要素 35
 - (2) 昔氏の始祖神話——箱舟漂流と脱解 39
 - (3) 金氏の始祖神話——金の箱による降臨 42
- 4 伽倻の始祖神話——『三国遺事』の「駕洛国記」神話と『東国輿地勝覧』の伽倻山の女神「正見母主」神話 44
- 5 娑蘇神母の説話 49

(1) 『三国史記』『三国遺事』に見られる娑蘇神母 49

(2) 娑蘇神母の神話的ルーツとしての西王母 53

第三章 古代日本の建国神話に見る天神と日神

1 天孫降臨神話——「駕洛国記」神話との類似性 64

2 神武天皇の東征（東遷）神話——「日下」の戦いとニギハヤヒの日神的性格 69

3 八咫鳥——ハンガリー建国神話や中国の文献に見られる鳥の先導 74

第四章 古代日本の民俗信仰における天神と日神

1 アマテラスと伊勢の日神信仰 82

(1) 伊勢の太陽崇拜——猿田彦 83

(2) 神島のゲーター祭 91

(3) 大和朝廷による天照大神の祭祀と朝日郎征伐伝説 93

(4) 『伊勢国風土記』逸文の伊勢津彦伝説 99

2 『おもろそうし』に見る琉球（沖縄）の日神「テダ（ティダ）」 103

3 タカミムスヒと対馬の日神信仰 108

(1) 「顕宗紀」に現れた日神と月神——日神・月神の祖としてのタカミムスヒ 111

(2) 対馬の阿麻氏留神社と高御魂神社の祭神

118

第五章 古代新羅の延鳥郎・細鳥女伝説と古代日本の天日矛伝説

1 延鳥郎・細鳥女伝説——『新羅殊異傳』に見える大内氏渡来伝説 122

2 「都祈野」と日神信仰 132

3 天日矛の出自——阿加流比売の日光感精神話、蔚山出身の製鉄集団 140

4 天日矛とその一族の伝説——記紀や他の古書に見る日矛の日神的要素 150

(1) 日矛と天皇家の祭祀との結びつき 150

(2) タジマモリと「時じくの香の木の実」、『竹取物語』の「かぐや姫」伝説 154

(3) 出石乙女伝説と丹塗矢伝説 161

第六章 日神的天神の源流——モンゴル系、ツングース系、トルコ系民族におけるテングリ(天神)信仰

1 日神的天神 166

2 獣〔狼〕祖神話と壇君神話 169

3 モンゴル神話の日神、アランⅡゴア 173

4 韓国・日本の神話との共通性——先行研究による補説 181

第一章

天神（天空神）と日神（太陽神）

—— M・エリアーデによる分析

本書は、古代の韓国と日本の建国神話ないし王権神話に見られる、国家や民族の最高神・始祖神としての天神てんじんと日神の比較研究である。

ここでいう天神は「天空神」、日神は「太陽神」と同じ意味である。「天」「天帝」「皇天」などとも呼ばれる、元来は空を神格化した神が天神だが、東アジアの諸民族や国家では、天は日神との密接な関係において崇拜されてきたと思われる。

例えば、古代韓国の高句麗や百済の建国者である朱蒙は「天帝の子」とも「日子」とも記され、天神の子か日神の子かは中国や韓国の史書によつてまちまちである。日本の初代天皇とされる神武天皇にしても、その祖先が「天神」なのか「日神」なのか明確ではない。

このように、同一視されがちな、天神と日神は本質的に異なる神概念である。ここではまず、M・エリアーデ (Mircea Eliade) の学説を援用して、「天神」と「日神」の基本的な概念を明確にしておきたい。そのあとで、韓国と日本の建国・王権神話を個々に考察して、現在まであまり注目されなかった天神・日神の要素を探り、最高神の特性を明らかにしたい。

1 空の聖性顯現ヒエロファニーとしての天空神（天神）

M・エリアーデは、『太陽と天空神 宗教概論Ⅰ』（一九七四）において、私たちが見上げる空は単なる物理的な空ではなく、そこにヒエロファニー（hierophany、聖性顯現）が感じられるとき、天空神となるという。彼は次のように述べている。

天空的構造をもった神々の像を検討する前に、天空そのものの宗教的な意味の理解に努めよう。あえて神話的寓話化に訴えなくとも、天空は直接にその超越性、力、聖性を啓示する。空をただ眺めるだけで、それは未開人の意識に宗教経験を起させる、と、このように断言しても、それは必ずしも天空神を「自然崇拜」することにはならない。古代心性にとって、「自然」は単に「自然的」なだけであることはけつしてない。「空をただ眺めるだけ」という表現は、それを未開人と結びつけてみると、まったく別の意味をおびる。未開人は、われわれには想像するのにもむずかしいような激しさで、日常的な奇蹟を受け入れようとまちかまえているのだ。このように眺めることは、啓示に等しい。天空はあるがままのものを啓示する。すなわち、無限、超越である。空はおよそ人が表象するものや、人の生活空間とは、すぐれて「まったく別のもの」である。空の超越性のシンボリズムは、ただその無限の高さを認識

することだけから発生してくる、とさえいえよう。「いと高きもの」は当然、神の属性となる。人が近づきたい上層、星座圏は、超越、絶対的實在、永続といった神々しい威光を獲得する。⁽¹⁾

天空は超越性を、力を、不変性を、その存在そのものによって「象徴する」。天空が存在するのは、それが、高く、無限で、不変で、力強いからである。「高い」ということ、「高み」にあるという単純な事実が、「力強く」……そして聖性にみちあふれていること……に等しい。⁽²⁾

またエリアーデの考えによれば、天空神への信仰は古今東西の諸部族・民族に見られ、人類にとって天空神は最も普遍的で原初的な神である。そのために天空神は、王権と結びつくと国家の最高神ともなる。古代メソポタミアのシュメール人の神「アン (An)」、古代バレスチナの「エル (El)」、イスラエルの「ヤハウェ (YHWH)」、ギリシアの「ゼウス (Zeus)」、また中国の「天」、アルタイ語族の「テングリ (Tengri)」などがそれである。このうち東アジアや北東アジア関係のある「天」や「テングリ」について、エリアーデは同書で次のように述べている。

……このような、全世界的な王国、天上の主権者の地上における子または代理者、という

概念は、中国人においてもみいだされる（同様にいくつかのポリネシア住民にもある）。中国の古い文献では、天の神は二つの名称をもっていた。すなわち、「天」*T'ien*（「天空」「天空神」と、「上帝」*Chang-Ti*（「高貴な主」「天の主権者」）である。天は宇宙の秩序の調整者であり、九層の天の最高頂にすむ至高の主権者である。……皇帝は「天子」であって、天神の地上における代理者である。……この主権者は社会の安寧秩序だけでなく、大地の肥沃・宇宙の周期の正常な運行をも保証する。地震その他の災害・大異変が起ると、中国の主権者は自分の罪を告白し、浄罪の儀式に専念する。⁽³⁾

モンゴルの至上神の名はテングリ (*Tengri*) である。これは「天」を意味する。⁽⁴⁾

……モンゴル人は天がすべてをみそなわす、と信じており、かれらが誓約をするときには「天よ知り給え」とか「天よ見給え」と宣言する。天の送る合図（彗星、旱魃など）の中に、かれらは神の啓示、命令を読みとる。創造者、見者、そして全知で、法の守護者である天空神は、宇宙の支配者である。とはいえ、この神は直接には治めないが、地上に政治機関が現れたときには、神は地上の代理者、カンたちをして統治せしめる。⁽⁵⁾

また『世界宗教史Ⅱ』第十六章「古代中国の宗教」において、エリアーデは「天」について以

下のように述べている。

周王朝の初期の段階において、天空神である天や上帝は、擬人化された人格神の性格を有している。それは天の中心、大熊座に住まわっている。さまざまな文献にはその天空神的な構造が示されており、天や上帝はあらゆるものを見聞きして、観察することができ、千里眼ですべてを知って、その命令には絶対に誤りがない。天や上帝は、条約や契約を結ぶ際によびだされた。あとになると、全知全能の天は、孔子をはじめとするさまざまな学派の思想家や、道徳家や神学者によって崇拜されるようになった。けれども、彼らにとって天空神は宗教的な性格を失いに失い、宇宙の秩序の原理、道徳的法則の根拠へと変化していく。至上神のこういった抽象化と合理化の過程は、宗教史において頻繁にみられる現象である。……しかし、天は王朝の守護者であり続ける。王は「天の息子」である……⁽⁶⁾

エリアーデによれば、天空神は、天空の超越性・高貴性、永続性といったヒエロファニーにおいて私たちにとって神となり、ついには民族や国家の最高神になってゆく。むしろ天空神は、人類の素朴な自然崇拜（ないしは自然の力へのおそれ）にも結びつく。その崇拜の対象は、天体の自然現象である、天空・日・月・星辰・大気（風）・雲・雨・虹等である。さらに天空神の属性は、今挙げた天体の自然現象に対する地上の現象、つまり大地・山・海・川・沼・火等とも関連して

あとがき

本書は、二〇〇六年に学位を得た、桜美林大学の博士論文を中心に、その前後に発表したいくつかの論文もあわせて、一部を修正・補筆してあらたに書き下したものである。

とりわけ新羅の「娑蘇神母の説話」（二章5）は、博論のあと新しく研究した部分であるが、ここでは中国の崑崙山の女神、西王母を取りあげ、娑蘇との関係を推測した。多少、強引な関係づけと思われたが、本書はあくまでも歴史的な研究ではなく、神話の研究なので、それも許されるところと考えた。

本論において詳述したが、神話の主体や人物は、神話それ自身の内部でその神話が語られる歴史的環境の中で変容するのはふつうに見られる現象である。西王母にあつてはそれがいちじるしい。『三国史記』や『三国遺事』の著者たちも、娑蘇伝承を書きとめながら、それにあえて自らの注釈を加え、さまざまな推測と説明を試みている。断片的にせよ娑蘇伝承があつたのだから、それが西王母に結びつき、さらには娑蘇説話そのものが日本のアマテラスとの何らかの神話的關係をもつことを示唆しても、あながち無謀とは言えないであろう。

ともあれ、本書は天神・日神に関するささやかな韓日神話の比較研究である。これは一里塚であり、今後、読者諸賢の御批判を仰ぎながら、さらに研究をつづけていきたい。

◆著者略歴

延 恩 株 (ヨン・ウンジュ)

韓国ソウル特別市生まれ。桜美林大学大学院博士後期課程修了。学術博士。専攻は国際文化学、環太平洋地域文化、日韓比較文化、韓国語教育。2003年、桜美林大学、和泉短期大学非常勤講師を経て、2009年から桜美林大学専任講師。2013年、大妻女子大学准教授。著書は『韓国—近景・遠景』『速修韓国語 基本文法編』（いずれも『論創社』）『韓国単語カレンダー』（石田総業）を2009年～12年まで責任編集。共著に『スウェーデンボルグを読み解く』（春風社）『文化研究の新地平—グローバル時代の世界文化 第2巻』（はる書房）。主要論文は、「韓国のシャーマニズム—史的概観とムーダンの成巫過程」（『人体科学 第12巻1号』所収）、「儒教の宗教性に関する一考察—韓国と沖縄のシャーマニズムとの関連において」（『アジア文化研究 第10号』所収）、「新羅の日神信仰の一考察—延烏郎・細烏女説話を中心に—」（『アジア文化研究 第18号』所収）など。

韓国と日本の建国神話

——太陽の神と空の神

2018年10月15日 初版第1刷印刷

2018年10月20日 初版第1刷発行

著 者 延 恩 株

発行者 森下紀夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル（〒101-0051）

tel. 03（3264）5254 fax. 03（3264）5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1765-1 ©2018 Yeon Eun ju, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。